

現代に生きる狂言



鼎談後に演じられた狂言「磁石」

2002年11月10日(日) 13:00～
琵琶湖博物館ホールにて

名乗り

中森 琵琶湖博物館ではいま、企画展『中世のむら探検 近江の暮らしのルーツを求めて』を開催していらつしゃいます。中世の暮らしを現代に伝えると言えは、狂言もその一つですが、今日は私が司会役を勤めることになりました。
川那部 有難うございます。中森さんは狂言にもたいへん詳しく、もう五年前になるでしょうか、大津市歴史博物館の企画展「狂言のふるさと近江 古面が伝える中世の民衆文化」を主催されました。
中森 本日もお迎えしましたのは、狂言大蔵流の茂山千之丞先生でございます。京都に茂山家という狂言のお家がありますが、茂山先生はそのご出身で、演出家として、もたいへんな活躍でございます。

ところで狂言には、最初に名乗がございますね。先ずはそれによって、自己紹介をして頂きたいと思えます。
茂山 (せりふ調で) まかり出でたるものは、茂山千之丞でございます。(笑)
中森 というふうに狂言は始まるわけでございます。

能と狂言

中森 とところでそもそも狂言は中世、十四世紀くらいにはじまった、滑稽な台詞劇と思ってるのですが、いかがでしょうか。
茂山 それでいいと思えます。た

だ、能と狂言をいっしょに考えられる方が多いのですが、それは違います。能はミュージカルと違って頂いて良い。歌があり踊りがある、台詞もある。それに対して狂言は、純粹の台詞劇。今のテレビドラマとか、ふつうの劇などともまったく同じ、芝居なのです。またある人が最近、狂言は中世、室町末期の吉本新喜劇だと言いました。(笑)

逆に言えば、吉本新喜劇は現在の狂言がもしれませぬ。つまり狂言は、「いま」の社会をスケッチしたものです。狂言にとつては、室町時代が現代ですから。
川那部 狂言の中には、「お祝い」が主になっているものもありますね。ああいうものは、後になって出てきたのでしょうか。

茂山 最初の頃にもあつたでしょうが、ほとんどは破局で終わる。かたちだつたらうと思えます。普通の狂言の「やるまいぞ、やるまいぞ」の形式のものが、江戸時代になつて祝言性といいますが、「めでたし、めでたし」で終わるものに変化していくものがたくさんあります。つまらなくなつたわけですよ、それだけ。
川那部 小学校の終わりのほうで、狂言を一番、国語の授業で習いました。「末広がりにして、見よう見まねで演じたことがあります。あれも「げにもそうよ、やよ、げにもそうよ」でしたか、二人が傘の下で踊るところで終わっていましたね。

茂山 ええ。いつころああいうかたちになつたか、はつきりはわからないのですが、あれも最初は太郎冠者が失敗して、主人に叱られて終わったのだと思います。「めでたし」で終わるかたちを探るようになったのは、江戸時代になつてからでしょう。

中世という時代

茂山 江戸時代では、特に武士階級の主人と家来の関係、これは絶対的なものでしょう。しかも、自分の主人は、自分の子の主人でもあり、孫の主人でもあるわけです。代が代わつても主人と家来の関係は変わらない、いわゆる封建システムです。狂言の母体になつた中世は、奉公関係といいますが、主人の用を勤めるかわりに自分の身を守つて貰うという、相対的な関係ですね。だから、その家がつまらなくて飛び出して、次のご主人のところに行くなどは平気です。加藤周一先生は、戦争さえそつたと言つてます。中世の戦争では、寝返りは当たり前、旗色が悪くどちらかの大將が死んだとき、戦争が終わる。(笑)それが、大將が死ななくなつた。現代の戦争では絶対に死にませぬ。死ぬのは兵隊ばかりです。(笑)雇用関係もそう変わつてきたのではないで

この狂言は、まさに
奇想天外な発想ですね。



琵琶湖博物館館長
川那部浩哉

しょうか、中世から近世にかけて。狂言から見ると、中世は日本の歴史の中で一番、民主的な時代ですね。

川那部 中世史が御専門の滋賀県立大の脇田晴子さんは、前回、男女関係もそうだとおっしゃつてました。平安時代は「男が通う」時代、「嫁入り婚」は江戸時代からで、それに対して中世は「一夫一妻の同居婚」で、男女平等の時代だつた。

茂山 平等以上に女が強いですよ。狂言には「わわしい」という言葉があります。狂言に出てくる女房は、百パーセントわわしいんです。(笑)中世の「わわしい」は、「口八丁手八丁」。実行力抜群で、亭主をこき使う女性。(笑)しかも、それを愛してる亭主。そういう夫婦関係ですね。昔の夫婦

関係という、男尊女卑とか亭主
関白とかを連想するのですけれど
も、これは江戸時代の儒教道徳の
もとで、ああいう家庭になったん
じゃないですか。狂言に出てくる
女、嫁さんというのはずごいです
よ、頼もしいですね。(笑)

近江と狂言

中森 狂言のルーツは近江だとい
う話も、聞いたのですが。
茂山 能も狂言も、大和が故郷だ
と思われていますが、狂言はそう
ではないんです。狂言の故郷は、
一つは京都の南にある宇治です。
もう一つは、この近江の坂本なん
です。私たちは大蔵流ですが、大
蔵流の先祖に「日吉」とか「宇治」
という名字の家が何軒もあるん
です。能のほうは大和猿楽で、確

に大和が故郷ですけれども、狂言
はどうも近江と山城が発祥地だ
と思います。

中森 茂山先生のお家の大蔵流の
元祖は、比叡山の玄恵法印とい
う名僧だと言われていることもござ
いますね。ところで、狂言とい
うのは意外と、その舞台がわから
ないですね。

茂山 「これは、このあたりに住
まい致す者でござる」というよう
に始まるのが普通ですからね。
「このあたりとはどのあたりだ」
と(笑)、良く聞かれますが、「こ
のあたりとは、いま狂言をやっ
ている場所のあたり」という意味
でしょう。

川那部 登場人物に具体的な名前
のないのも、能と違ってですね。
茂山 そうです。「業平」とか

「弁慶」とか、「熊野」とか「松風」
とか、能には名がある。それに対
して狂言は、例えば「これは遠国
に隠れもない大名です」と言うば
かりです。奉公人のほうも「太郎
冠者」「次郎冠者」で、これは召
使いの順番を言うだけ。若い女人
の名前は全部「いちや」、女房は
「おこう」で、これは后です。つ
まり、すべて無名なんです。地名
も登場人物名も、基本的にない
というのは、お客さまの代表が衣
装を着て、やっているのが狂言だ
と言象徴でしょう。

狂言「磁石」

中森 とここで、今から演じて頂
く「磁石」は、珍しく地名のはっ
きりしたものです。

茂山 そうです。大津の松本とい
う場所での話です。

中森 松本というのは、今の石場
で、江戸時代には、ちょうどこの
草津との間に舟が通っていました。
もう少し古くを言いますと、
あのあたりは粟津の一部で、京都
で魚商売を始めたのは、この辺の
女の人が最初です。古くから繁華
なところだったと思います。

茂山 この狂言は、冒頭から地名
がいくつも出てくるんです。先ず、
「このあたりに住まい致す者」の
代わりに、「これは遠江の国、見
付の宿の者でござる」と、はつき
り言う。その男が京都へ遊びに
来る途中で、三河の八橋とか、尾張
の府中を通り抜けて、近江へ入
ってくる。そして、坂本の市で市立

ち、市場見物をするんです。

そこへ「大津、松本のあたりを
走り回る、心も直ぐにない者で
ござる」と名乗る男が出る。「心も
直ぐにない」とは不正直な、まっ
とうに生きられないアウトローの
男だと言っわけです。それを私が
やります。ともかく土地の名、松
本・坂本・大津というのがはつき
り出てくる、「ご当地もの」です。

川那部 磁石を使った劇と言え
ば、歌舞伎十八番の一つ「毛抜」
のほうが一番には有名でしょう
が、この狂言は、まさに奇想天外
な発想ですね。

茂山 太刀を抜いて追いかけられ
てあわやと言つときに、今まで逃
げていた男が、突如振り返ってそ
の太刀に対して大口を開け、「わ
あ、飲もう」と言う。「実は私は
磁石の精だ」と言っわけです。そ
れに、この精が産まれたのは唐土
で、中国の鉄を全部飲んでしまっ
たから、今度は日本の鉄を飲もう
と渡ってきた。昨日間違つて青銅

の鉄を飲んでしまい、のどに詰ま
って不愉快だから、良さそうな鉄
の刀を飲んで、喉の詰まりを外に
出したい。そういうわけです。

川那部 最近イギリスなどで評判
の、ナンセンス劇の典型ですね。
茂山 そうです。伝統的な狂言は
決して骨董品ではなくて生きてい
るのです。これから「磁石」をこ
覧になって、随所でみなさんお笑
いになると思います。皆さんの今
日の笑いと、今から六百年前のお
客の笑いと、まったく同じ笑い
である筈なんです。

つまり、狂言は決して死んでい
ない、生きていくということだと
思います。

川那部 茂山さんの新作の狂言
も、素晴らしいものですね。

中森 ちょうど結論が出たよう
でございます。鼎談はこれで終りに
して、狂言「磁石」のほうに入り
たいと思います。どうもありがと
うございました。(終了)

狂言役者・演出家
茂山千之丞氏



皆さんの今日の
笑いと、今から
六百年前のお客の
笑いと、まったく
同じ笑いである筈なんです。

大津市歴史博物館次長
中森 洋氏



ところで、今から演じて
頂く「磁石」は、珍しく
地名のはっきりしたものです。